

7月 27~28日 (月、火)

すみれ組

担任名 稲野辺紗希

《新幼児教育講座 きょうの今を生きる-子どもと共に創る保育-》

基調講演では、「脳科学から見えてきた乳幼児期の保育と教育」というテーマでお話ししていただいた。脳科学という視点から興味深いお話をたくさんしていただいたが、中でも“小さい時こそ本物が必要”という話が印象的だった。水の感触、温度、葉っぱや花の匂い…など、実際に見て触って感じることは心に残ると思うし、幼児期に色々な刺激を与えずにいると神経が死んでしまうという話もあったので、子どもの頃に五感を刺激されるような様々な体験が出来るような環境を整えてあげたいと感じた。

1日目 Dコースの“保育を繋ぐ架け橋に”では、「心の通う保育の伝え方」について井桁容子先生にお話をいただいた。人は、見たものを見たいように見てしまったり、思い込みから間違った情報で物事を認識してしまうことがある。だからこそ保育において、子どもに、保護者に、自分の心に対して、真摯に学び、聴き、振り返ることが、子どもを深く観るために大切であると教えていただいた。もちろん、自分の見たことを保護者にどのように伝えるかで子どもの育ちも変わってくるといえる。また、「ごめんね」「いいよ」や、「かして」「いいよ」のやりとりの定番化は、社会性の捉え方の間違いにつながるという話が印象的だった。「いいよ」と言いたくない時もあるし、その時の状況を見て自分で考えて思いを発信していくことが大切なのではないだろうか。だから保育者は、こうなったらどうなるのかな、と問い掛けたり、子どもの色々な感情体験に共感して言葉に出してあげたりしていくことが必要であるのだと学んだ。また、保護者は、子どもの失敗を恐れ結果を急ぎ、どうやったら言われた通りに出来る子になるか考えていることが多いという。だから保育者は、先生のお話にもあったように、子どもひとりひとりの育ちの過程を大事にし、その子がその子らしく生きていけることを保障し、それを保護者にも見せてあげることが必要であるのだと分かった。

2日目のDコースでは「遊びや学びを保護者に伝えていくためには何が必要なのですか」というテーマで、安見克夫先生にお話をいただいた。お話を聴いて、保育を保護者に発信していくことの大切さに改めて気付くことが出来た。またその時々により、園情報を適切に伝える媒体を選択し、情報

を受け取る側の視点で考えていくことが必要だと教えていただいた。伝える情報の整理の仕方として、伝えたいことと伝えづらいことをよく見極め、子ども同士の比較や子育てを煽るような言葉には気をつけること、そして何より園でのあそびや生活の主たる伝達者は子どもであることにきちんと意識を向けなくてはいけないとお話ししていただき、日頃保護者の方とお話をしたり、面談をしたり、クラス便りを書いたりする際の自分をもっと見直していきたいと感じることが出来た。さらに講座の後半では、二人一組になり、記者という立場で園の先生に取材をするというワークトレーニングを行った。聞きたいことを聞き出す難しさ、聞いたことを文に起こす難しさを感じた。文章に限らずとも、伝えたいことをきちんと相手に伝える力も、保育者としてかせないものであることを知った。

二日間の研修で学んだことをきちんと心に留め、二学期からの保育に生かしていきたいと思う。貴重な研修に参加させていただき、ありがとうございました。